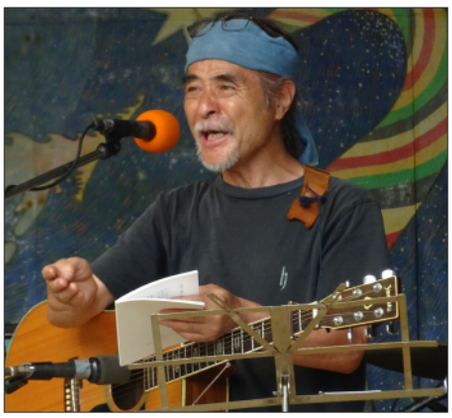
先月８月５～８日に福島原発から 20 数 km にある獏原人村の満月祭に初めて行ってきました。そこで何人かにお話をきくことができたので、今号と次号に分けて掲載します。まずは福島に住み、佐渡で保養キャンプを行っている詩人の関久雄さんです。　（あ）

獏原人村から①

関 久雄 さん



→８月７日、満月祭ステージで歌い，詩を朗読し，話す関久雄さん。

【ステージのトークより】　僕が詩を書き始めたのは、自宅の庭の土をもって東京まで歩く「灰の行進」ていうのを 2012 年にやりました。この土の中の放射能は私のものではない、国と東電に返したいと。約１ヶ月かけて東京まで歩いて、そして東京電力と経済産業省に灰を返しました。

その時の様子を詩の形でリポートしていたんです。そうするとすごく反応がよかった。そういうことがあって、詩の形で福島の今の姿を伝えようと思って、それからずーっと書き綴ってます。決して上手でもなんでもありません。でも福島の今を伝えるということを自分に課して、一週間に一ヶ書こうと思ってます。友だちがブログに「関久雄の原発いらないいのちが大事の歌」ってことでアップしてくれてます。(http://johnny311.exblog.jp/)

詩集も自費出版で４集まで出しています。

「文化の力で福島の今を伝える」ということを考えながらやっています。

【インタビューより】

昔、ヒマラヤの冬山でクレバスに落ちそうになって、死ぬかなと思ったことがある。

でもぎりぎりのところで助かったので、何か自分にはやることがあるだろうなてことがわかった。そして戻ってきて行ってみようと思ったのがほびっと村だった。そこで呼吸法を学びたかった。ヒマラヤに行くと低酸素になるから。

でもほびっと村に行くうちに、これかもしれないなと思ったのが、有機無農薬野菜なんだよね。つまりおいしいトマトがあると、思想の右も左も超えるなと。右翼でも左翼でも、みんな食べるとおいしいと言うんだ。それで、これは実は福島のなんとかさんが作ったんだよというと、なるほどと言う。だから考えとか立場の人たちをつなぎ合わされるツールだなと。それで、よし八百屋をやろうと思って始めたんです。ようやくそこまで自分を肯定できた。

それまでは、自分の家が創価学会だったから、やっぱり弱いから宗教心、信仰心を持つわけ。ところが、あの当時、学生運動が盛んな時期だったから責められる。お前は共産党だったらわかるけど、なんで創価学会なんだと（笑）言われるわけ。逆に学会の人からは、もっと信心頑張ってくださいよと言われる。だからどっちにもつかずに、俺って中途半端だなと思っていたんだけども、でも八百屋の仕事に出た時に、ああそうだ！自分はつなぐという役割があるのかな、と思って自分を肯定できたんです。だからそれ以降はだいたいそういうかんじの生き方なんです。まるっきり敵もいないけど、まるっきり味方もいないという。両方に繋がるから、その中でほんとに大事なことは何なのかを見いだして提案するということをやろうと思ってるから、そういう形でずっと来て、体を壊して福島に来て、こうやって原発事故があって、いま関わってるのは、逃げるか残るかとかという対立じゃなくて、たとえば保養ということなら基本は誰も文句を言わない。推進派、賛成派の人でも、問題無いけど心配な方はどうぞというレベル。それが去年くらいからは、保養は必要ないというのが出てきた。そしてクラウドファンディングでバッシングされるようになった。（＊保養のことでクラウドファンディングをやったところネットでバッシングされた）

そして今年の２月だったか（石川県での会議の話し：保養不要論）があった。その会議の持ち方は順番にみんなの考えや意見を述べ合うというものですばらしかった。けっきょく保養が不要だと言ってたのはさいしょに問題提起した人だけだったんだけど、そのことを原稿に書いたら，実はほかでもそういう話しはあるんだよと言われた。

今までは学者さんだとか専門家だとかえらいさんが、問題ないですよと言ってたけれど、それが今度は一般の人から出てきた。

それを聞いて思ったのは、こうやって福島に５年も６年もいると、ここにいる意味、ここを出る意味をそれぞれが表明しなければならなくなっている段階なのかなと思った。なぜ私はここから出て行くのか、それぞれが存在証明というか、そういうことを言わなきゃならなくなってるんだなーと思って。出る人は出るワケ、残る人は残るワケ、俺みたいに点々とあちこち行ったり来たりする人はそのワケを。でも多くの人は沈黙してる。声を出さない。

あるお母さんが教えてくれのは、保養に行くのは黙っていく。で、そういう私たちのことを「隠れ気にしたん」て言うんだって。ねー、笑えない話なんです。気にしていないフリをして保養に行くわけです。福島の中で、底辺のところでみな感じているみたいね。

去年の７月に選挙で安倍晋三が福島に来た。俺はたった一人でスタンディングやって、すぐガードマンにばーって囲まれたけど、みんな日の丸の小旗もってわーって振ってるでしょ。するとみんな知ってる人だから、関はこんなことやってるのかって顔して見るわけだ（笑）。それはまあいい。その人たちはどう見ても自民党支持者に見えるけれども、選挙では自民党負けたんだ。沖縄も野党候補が勝ったんだ。だから底辺のところでは、この状態は良くないとみんな思ってる。当事者で非常にしんどい思いをした人はどっかで気づくんです。

事故から５年も６年も７年もたつと、そこらへんに置いてあるフレコンバッグの山とか見ても何にも感じなくなる。線量計見ても何にも感じないという状況です。ずーっとそれを意識してると壊れちゃうから。ここに住んだらいけないんだと思うと、出るしかないでしょ。出れない人はどうするかといったら、せめて考えないようにするしかない。見た瞬間に思い出すわけだから、いっつもそんなこと考えてたらもたないよ。でもまたそういうことをバッシングす

←ステージのあとインタビュー

↑へっついの家のツリーハウスの前で。（FBより）

る運動家もいるからね。福島で子供を育てるのは人殺しだとか。そう言うのもいるんだよ。もうぐちゃぐちゃ。

―― いま関さん自身はへっついの家の保養を中心にやってるんですか？

● そうだね。でもメインは夏と春なんだ。ほかの時期の利用の方法を考えたりしてるんだけど、そううまくいかないから、お金も払って借りてるからね。月３万の家賃と水道光熱費がかかる。だから返してその時だけ借りたらという案もあるんだけど、建物というのは人がいて管理しないといけないし、俺にしてみればそこはある種の学校なんだ。そこに来た子供達が遊び、プレイパークもあって畑もあって、いろんなことが見えるっていうことで伝わるものがあるんじゃないかなと。その時期だけ借りるということではちゃんとメッセージが伝わらないんだよね。

福島の人間がやってる保養はたぶんうちだけ。福島に住んでる当事者が金も集め人も集めてやるというのは。

俺もあと何年続けられるかわからないけど、そこを維持したいなって思ってる。

―― 利用する人は減ってきてるんですか？

● 保養する人の数は減ってない。僕らも関係する受け入れ全国協議会というのがあるんだけど、そこでの調査でも、だいたい年に 7000 人から 9000 人は出てる。そして福島の子供は 30 万人。福島の人口は 200 万人切ったけど、だいたい 198 万人くらいかな。それで 30 万人の子供のうち毎年 9000 人くらいが保養に出てる。リピーターが多いので、今まで一回も行ったことがないという人もいるんだね。うちがすごい大変だけどがんばってるのは、保養は１ヶ月か２ヶ月かやりたいという気持ちがあるから。３泊４日とか週末保養とかリフレッシュにはなるけどね。だからずーっと続けることが大事だということなんだよね。

一番多いのは小学生以下。中学生になると部活が始まるし、前は高校生も来てたけど、今はこない。今進めているのは、活動家の保養。活動家も休んだらいい。もう頭がいっぱいいっぱいだから。アクティビストの保養、これは絶対に必要だとは思うよ。

―― 保養キャンプではどんなことを？

● キャンプは基本、海など福島ではやりにくい外遊びをすることと、昔ながらの暮らしなど共同生活体験です。キャンプの最後のほうにこだわってやっているのが「原発ミーティングです。原発事故が起きて大変だったこと困ったこと、体の具合が悪いとか、みんなで話し合う。事故当時２才だった子供達なんかはわからないという。そしたら泣き泣き避難した話なんかを紙芝居でやったりして、みんながそれを見て話し合ったりする。あと飯舘村の牧場で馬が次から次へと死んでいって裁判になったんだけど、そのことを基にしてみんなで感想を話し合ったりする。それはたぶん自分が当事者だからできることでもあるんだろうなと思う。

こういうことを通して自分の役割をやろうと思ってるんだけど、運動がだんだん難しい状況になってる中で、文化とか音楽などが変わるきっかけのキーワードになるなと思ってる。だから今は詩の朗読会とか、2013 年は映画も作ってたんです。

＊**『保養がつなぐ大家族～むすんでひらくへっついの家』**保養から見える福島のいまとあした(2013 年/ドキュメント映画/日本/カラー/62 分)

なぜ福島から出なきゃならなかったのかとか、自分たちは誰でどんな社会に生きていきたいのかということをメッセージとして伝えていくことが、実は保養キャンプの意味なんだと思う。

保養キャンプをなぜやろうと思ったのかというと、最初の年の８月 17 日に福島の中学生たちが文部科学省に申し入れに行ったんです。自分たちがなぜここに置かれなくちゃいけないんだってことを。それを大人もサポートして行ったんだけど、そのことがあったから、前の日に佐渡で子どもたちを集めて、明日、福島の子供達が文科省に言いに行くんだと、みんながなぜここに来なきゃいけなかったのか、原発事故があってどんなことが起きたかみんなで話したいんだって言ったら、みんな出す出す、いっぱい出た。そして原発事故があってどうだったという質問の中で良かったことというのも聞いてみたら、「助けてくれる人がいるのがわかってよかった」と。あの時は泣いたね。

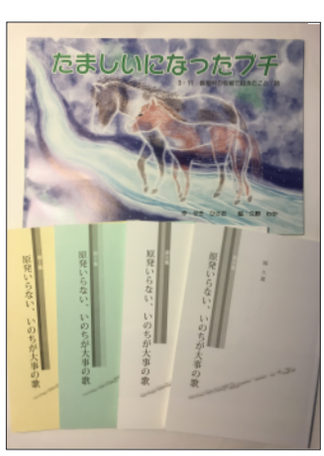
だからどんな状況の中でも人は楽しみとか希望を見出せる存在なんだなと思った。それで今後も続けようと思って今もずーっと続けてる。いろんな形に変えたりはしていて、前は造形作家で音楽もやってるだるま森とえりこさんが２年続けてきて、俺の詩を朗読劇にしてくれたり。それはそれで何らかの形で伝わったと思う。

うちのキャンプは快適ではないんです。古民家で共同生活だから。朝起きて布団をあげて、掃除して雑巾掛けして、お茶の準備も全部やるから。そして朝はミーティングからはじまえり夜もミーティングで終わる。お風呂も薪割りから自分たちでやるしご飯も炊く。でもそういう中でハマる人はハマって、リピーターが多いんです。そこで伝えてるのは、どうやって人は生きていったらいいか。この家は古民家なんだけど、へっついといって竈の跡があったんです。それで最初の 2013 年にそのへっついを復元するワークショップをやって助成金をとってやったんです。子供達と一緒に壁土を練って、１ヶ月かかってつくり、最後に火入れをするんだけど、それを見た時、これはすごいことだなと思った。つまり電気がなくたってエネルギーが作れるんだということでしょ。そういうことでへっついがあったのかと思って、それからへっついの家と呼ぶようになったんです。

「いただきます」　（関久雄）

２０１７年８月２０日

ミンミンと　朝を鳴くせみ
ふとん上げたら　雑巾がけ
たたみは　目なりに拭くんだよ
やがて　ごはんだよ　の　声
手をつないで　いつものお祈り
太陽と大地と　海のめぐみと
わたしたちを守ってくれる
すべての存在に感謝して
いただきます
白いお米のいのち　納豆のいのち
みそ汁のいのち　たまごのいのち
漬け物のいのち
みんなみんな　いただきます
デザートは福島の桃
測ったし　ベクレてないからだいじょうぶ
食べながら聞いてね
きょうは　海にいきます
お茶わん洗ったら　したくして
やったあ
ごちそうさまでした
いのち　いただいたら　洗い場に持っていく
佐渡は　きょうも晴れました
神さまと　みんなのおかげだね



関さんの絵本（上）と詩集（下）